第７号

にいはお

中国語を学ぶ会
平成１１年１０月発行
連絡先　０４６３－３３－３１７７
神山　FAX　３２－５５９４

爽朗的秋天

殊のほか暑かった夏も去り、やっと爽やかな秋がやってまいりました。

そこで秋にちなんだ中国の話題をひろって見たいと思います。

国庆节

この記事を読むころには華やかに行われた国慶節の報道を目にした後になりますが、今年は中華人民共和國成立５０周年という記念すべき年にあたるので、中国政府も特に力をいれているようです。

８月の中旬には、北京ではあの長安街の交通を遮断し戦車隊や新型ミサイルも参加し、陸海空三軍と武装警察２万人の予行演習を行いました。

式典には内外各方面から多数の人たちが参集するため、テロ活動の防止などにも大変な警戒体制を敷いています。ハイテク機器だけでは対処しきれない危険物を探知するため全国から優秀な警察犬４０匹を集め爆発物などの探知に当たらせるそうです。

気功集団「法輪功」を非合法組織として摘発を進めているのも不穏分子の芽を摘み取り平穏無事に１０月１日の国慶節を挙行したいとする意図がありありと見えますね。

中秋节

中秋節は春節とならぶ中国の重要な伝統的行事の一つです。今年の中秋節は９月２４日（旧暦８月１５日）で日本では台風１８号の影響でお月見はできませんでした。

中秋節に欠かすことのできない物は月饼です。中国の月餅は大きく２種類に分けられる。その一つは主に広州で作られる茶色い広東風月餅、もう一つは蘇州風で皮がパイ生地のように何層にもなった白い月餅だ。

中身は小豆餡、ひき肉、果肉などが一般的だが、北京のあるメーカーは新製品としてハミ瓜月餅を売り出すため新疆ウイグル自治区からハミ瓜の餡を３０トンも取り寄せるなど月餅商戦も熾烈をきわめているという。

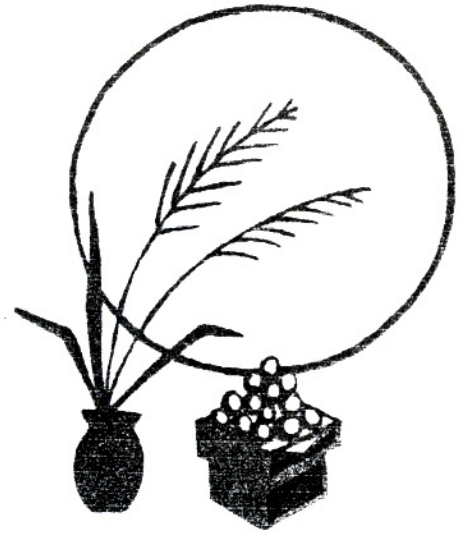
先月、杭州で土産に買った月餅はひどい上げ底の箱に入っていた。中国でも贈答が主流になっているとか、やはり見栄えが重視されているようだ。

お願いとご連絡

☆当会の同学、池沢登志美さんと鳥沢光代さんが日本語を教えるために９月から上海の大學へ行っています。上海だよりがありましたら本誌上でご紹介したいと思います。お楽しみに！

☆少し気が早いのですが今年の忘年会は１２月１６日（木）に行います。日程を空けておいて下さい。

☆どうにか「にいはお第７号」をお届けすることができました。今回はご寄稿が少なくて困りました。次号の原稿は１２月中頃までにお願いします。ファックス或いはEmail（sakuichi@d3.dion.ne.jp）または手渡しでも結構です。書きおわりましたら早めに送ってください。よろしくお願いします。



中国思い出の歌

星期三　額田幸也

青　藏　高　原

是誰带来遠古的呼喚　　是誰留下千年的祈盼

難道説還有無言的歌　　還是那久久不能忘懐的眷戀

哦、我看見、一座山一座座山川、一座座山川相連

呀啦嗦，那可是青藏高原

是誰日夜遥望着藍天、是誰渴望永久的夢幻

難道説還有贊美的歌、還是那仿佛不能改變的荘嚴哦、

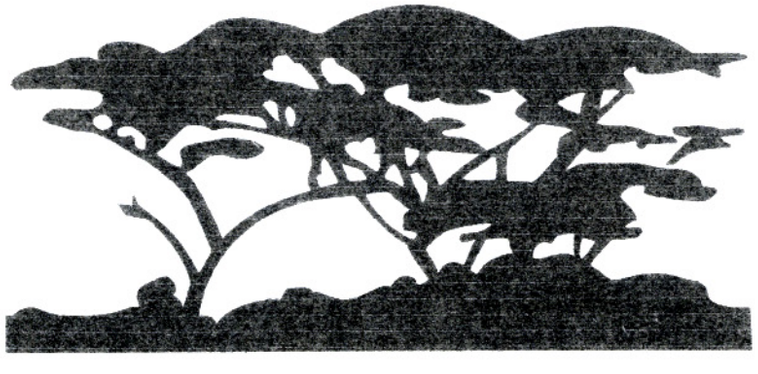
我看見、一座山一座座山川、一座座山川相連、

呀啦嗦，那就是青藏高原。

※　チベット高原　　雄大な感じの歌です

※　原文のまま（旧字が使われています）

※　テープ聴きたい方はお知らせ下さい



课堂中的汉语（其次）

星期三　額田幸也

老師	では時間が来ましたので後半の勉強を始めましょう。みなさんそろいましたか。	时间到了，我们接着来上课。大家都到齐了吗?
老師	では、今度は新しい課へ入りましょう。〇〇ページを開けてください。	下面我们学习新的课文。(进入新的课文) 请把书翻到第〇〇页
老師	では、いつものように始め私が読みますから、みなさん私のあとをつけて元気よく読んでください。	那么，跟往常一样，请大家跟着我读一下，提起精神大声读一下。
老師	よく出来ました。今度は私が読んで訳して見ます。	很好。下面我来读一遍，再翻译一下。
学生	今のところよくわかりません。もう一度訳していただけませんか。	刚才的部分，不太明白。 能不能再给翻译一下呢?
老師	今のところわかりましたか。では今度はみなさんに読んで訳してもらいます。〇〇さんからおねがいします。	到目前为直的部分大家都明白了吗?那么这次由大家来读，再翻译一下。 从〇〇开始。
老師	よくできました。何か質問がありますか	很好。有没有疑问的地方?
老師	では時間が来ましたので今日の授業はこれで終りにしたいと思います	由于时间到了。今天的课就讲到这里。
老師	宿題を出します。〇〇ページの練習問題をやって来てください	下面留一下作业。请把〇〇页的练习题做一下。
老師	ではまた来週まで。さようなら	那么(我们)下周再见。
学生	さようなら	(老师)再见。

〔追加〕

老師	何でも自由に言ってください。どこかへ行ったこと、家で過ごしたこと、家族のこと、友達のこと、何か食べたこと、なんでも良いです。どうですか。	不管是什么事情，请(大家)随便说一下。 比如去某某地方啦、在家里度过啦,还有家里的事情啦,朋友的事情啦，吃些什么东西啦等等都好，尽管说出来。怎么样? (有谁来说一下?)
学生	先生、やってみます	老师，我来说一下
老師	そこは〇〇〇ゆうふうに言った方がよいでしょう	那一部分应该这样说比较好一些，〇〇〇。
学生	先生、黒板に書いてください	老师，请您写在黒板上，可以吗?

黄山でご来光を見る

九月上旬、私は中国語を学ぶ会の同学四人と一緒に近ツリのツアーに参加し一个星期の中国旅行に行ってきた。

東洋のベニスとも呼ばれる蘇州、陶磁器で有名な景徳鎮、水墨画のような黄山、古来から地上の楽園と言われてきた杭州、そして上海と、各地をめぐって観光してきた。

今年は中国でも気象が異常だそうで、九月に入ってから暑さがぶり返し、連日三十五度を超える猛暑の中、汗まみれになっての一週間だった。

各地で美しい景色やすばらしい古代の遺物、のどかな農村風景などを見てくることができた。そして中国の人たちとも出きるだけ話しをしようと心がけてきた。

今回はこのツアーの目玉「黄山」について書いてみたいと思う。黄山といってもそうゆう名前の単独峰があるわけではない。黄山は面積一五四平方キロ、周囲一二〇キロのなかにある七十二の峰々の総称なのである。その内、一五〇〇メートル以上の峰は三十以上、最高峰の蓮花峰は一八六〇メートルの高さを持つ。

場所は安徽省の南部、北緯三十度付近だから鹿児島よりずっと南に位置する。黄山は昔から「天下の名景は黄山に集まる」といわれ、この山の美しさは李白や杜甫によっても称えられてきた。

なぜ黄山がこのように人々の称賛を集めているのだろうか。それは黄山特有の奇岩・奇松・それに雲海がおりなす山水画の世界にあるのではなかろうか思う。

前置きはこのくらいにして早速黄山に登ってみよう。市内のホテルを出発したバスはやがて山道にさしかかる。曲がりくねった登り坂をあえぎあえぎ進むと約二時間で黄山登山口のひとつ雲谷寺に到着する。

ここ雲谷寺に黄山山頂へ登るロープウエイの駅があるのだ。さて、黄山の現地ガイドの姓は閻魔さまの閻というという字を書く独身女性だ。話し出したら止まらないくらい早口で、しかも判りやすい上手な日本語を話す。黄山専門の彼女はもう数え切れないほど黄山に登っているが、今日のような良い天気は極めてめずらしいと言っていた。そう言えば黄山では一年の三分の二は雨が降るとガイドブックに書いたあったのを思い出した。

バスを降りると道端に杖を売る店が並び、さかんに声をかけてくる。握りの柄までついたなかなか立派な杖が一本二元（三十円ほど）だ。いかに人件費の安い中国でも二元は安いと思ったが、どうやら下山者が放置したものをリサイクルしているらしい。

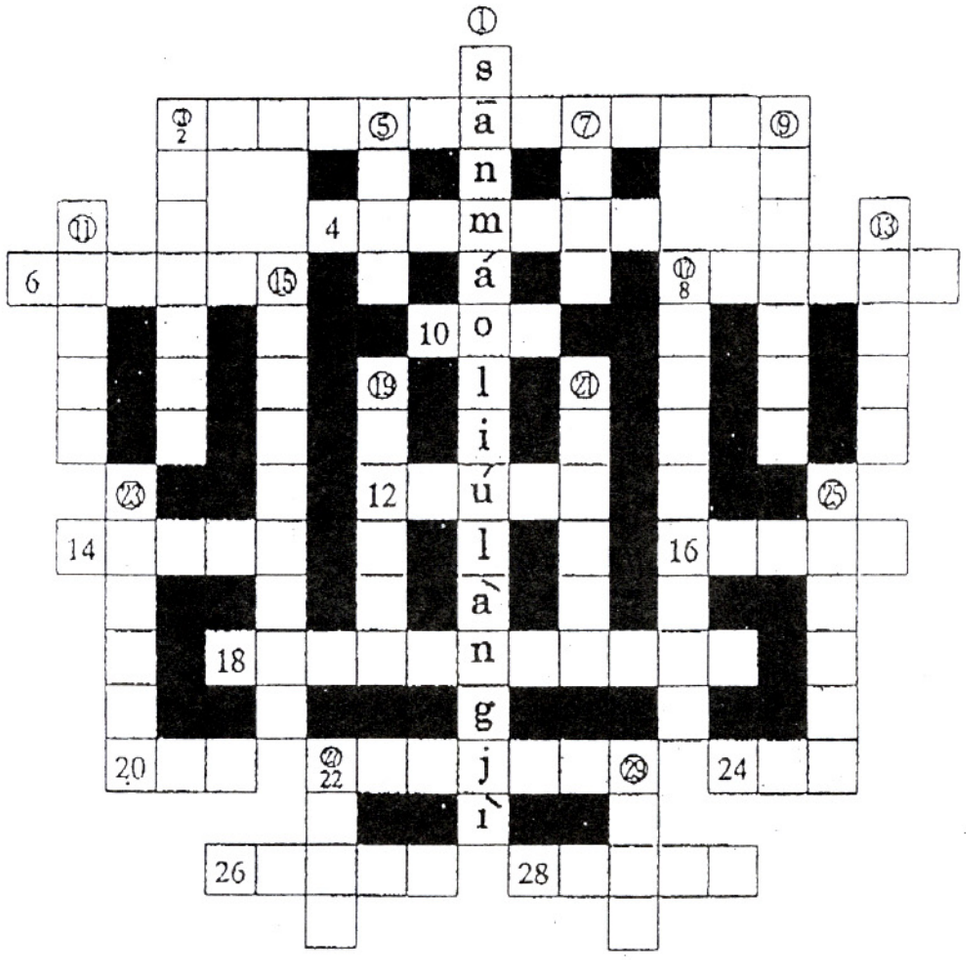
川崎重工製のロープウェイは四十人乗り、約十分弱で山頂まで全長二八〇四メートル、高度差七七三メートルを一気に運んでくれる。乗りたくない人は五三三六段の石段を四五時間かけて登ることもできるそうだ。

山頂駅は下界よりは幾分さわやかなものの予想していたほど涼しくない。二十七八度くらいはあるだろうか。これからホテルまで直行で四十分、途中一六八三メートルの始信峰に登ることになったので一時間半はかかるという。

スーツケースは山頂へは持って来れないので、一泊分の着替えや洗面具・パジャマ・雨合羽などを分けて持ってきたのでかなり荷物が重い。これを持っての山登りはつらいので強力に頼んでホテルまで運んで貰うことにした。荷物一個につき五十元だ。

また、やや足に自信の無い高齢者数人は駕篭に乗ることになった。駕篭といっても太い二本の竹ざおの中間に簡単な椅子をくくりつけたもので、それほど力持ちとも思えない二人の青年が前後で担ぐのである。我々はただ歩くだけでさえ息を切らし汗だくの山道を、駕篭を担いで行くのだから大変なことだ。駕篭代は五百元だがこれは経営

拼音游戏（ピンインゲーム）



<奇数は縦書>

①. 三毛流浪记
③. 贵州
⑤. 乖
⑦. 更
⑨. 尼罗河
⑪. 大事
⑬. 办法
⑮. 儿童节
⑰. 教室里
⑲. 不圆
㉑. 会心
㉓. 阴云
㉕. 一元
㉗. 爸爸
㉙. 个子

<偶数は横書>

2. 观光点
4. 高明
6. 看着
8. 九万
10. 走
12. 游戏
14. 墙
16. 喝酒
18. 江宁路
20. 您
22. 北京
24. 怎
26. 日本
28. 地主

※声調を主母音につけて下さい（①を参照）

林老師にいただいたゲームです。皆さんも挑戦してみて下さい。

者の収入となり青年たちには歩合か給料として報酬が支払われるようだ。社会主義の中国においても公然として搾取が行われているのである。だから青年たちはさかんにチップをほしがっていたという。途中、休憩をしていた彼らに「辛苦了！」と声をかけたらニコニコ笑顔の好青年だった。きっと地方の農村から出稼ぎにやってきたのだろう。

黄山はユネスコの世界遺産の指定を受けている。だから登山道も立派な石段で整備されているし、ゴミも落ちていない。ビニール袋と箒を持った清掃人が巡回し石段の落ち葉さえ拾っている。もちろん全山禁煙だから吸殻も落ちてはいない。

我々のホテルは黄山西海飯店、山頂では最高級のホテルで日本人欧米人台湾人など比較的リッチな人はここを利用する。ホテルとはいっても山頂のことだから、見高級山小屋風、それでも部屋にはツインベッド・バストイレ・カラーテレビがつき、レストランも広くて立派だ。部屋数も百室近くあるようだ。ほかにも、シャワーなし、トイレ共用とか八人相部屋のプレハブ造り宿泊施設などいろいろなものがあるそうだ。

山上の諸物資は強力が担ぎ上げると聞いていたので、ビールもさぞ高価だろうと覚悟していたら、レストランで飲んだ大瓶が十元と下界並だったのにはびっくりした。

昼食後は山上の峰々の観光ハイキングにでかける。歩く先々どこに行っても人が多い。山道を登る人、降りる人、そして美しい景色の見える場所では人だかりが出来ている。

織り成す奇岩の不思議な紋様、風雪に耐えぬいた樹齢数百年の力強い松の枝、ちょいと触れると落ちそうでなん百年も落ちない巨岩、いま見えていた峰をさっと消し去る雲の流れ、どれもこれも見飽きないすばらしい風景だ。

遠くからでも良く見える「飛来石」と呼ばれる岩がある。空高くそびえる峰のてっぺんにかろうじて立っている大きな岩、どこからか飛んできて乗っかったとしか思えない。によっきと立ち上がるその巨岩のまわりに人の姿が見えるではないか。遠くから見ているだけで足がすくみそうな風景だ。これから、はるか彼方のあの飛来石めざして登って行くのだ。

ガイドの閻さんに「あと五分だからがんばって！」と、何回もだまされながら汗をふきふきついに飛来石までやってくることができた。最後は手すりのついた狭い石段を十数段登ると、あのどこからか飛んできた巨大石のそばに立つことができる。巨大石のまわり半周はすぐ絶壁となっていて歩けない。残る半周はかろうじて歩ける五六十センチの余裕がある。簡単な鉄柵が設けられているもののその下は千尋の谷底が口を開けている。勇を鼓して渡ってみたが下を覗きこむことはできなかった。高さ七八メートルはあろうかと思われる細長い巨岩が何百年何千年もの間どうして倒れないのだろうか。不思議なことだ。

黄山では夕日とご来光がその美しさゆえに有名だ。いや美しさもさることながら、めったに見られない稀少性が珍重されているのかもしれない。我々は幸運にもこの両方を見られる可能性があると期待をふくらませた。

しかし夕方を迎える頃になるとと、どこからともなく涌き出た暗雲が周囲の峰々を覆いはじめた。夕日を眺めるにはホテルから歩いて排雲亭まで行かなければならない。しばらく様子をうかがっていたが残念ながら夕日鑑賞は断念せざるを得なかった。

次なる期待はご来光である。翌朝ご来光が見られそうだったら四時半にモーニングコールがあることになっている。しかし大半の人はコール前に身支度を整えホテルの前から空を見上げていた。そして満天に無数の星がまたたくのを見て、この分なら絶対に大丈夫だと自信を深めた。このような好機に寝ている人はだれもいないだろう。四時五十分懐中電灯で足元を照らしながらご来光がよく見える「清涼台」へと出発する。

（次ぎのページに続きます）

たかがギョウザ　されど餃子

中国菜のなかで最も日本の家庭に浸透しているのは餃子（jiǎozi）ではないだろうか。スーパーに行けば既製の皮が買えるし、あとは好みの餡儿（xiànr）を作って包んで焼けば食べられる。ちょっとしたお酒のつまみになるし、食事のおかずにもなる手軽で便利な食べ物だ。

若い頃ラーメン屋や居酒屋で食べたギョーザの味を思い出す。辣油をたっぷり入れた醤油をつけ、あつあつのギョーザを頬張ると韮菜（jiǔcài）の香りが口一杯に広がり、なんとなく元気が出たような気分になったものだった。

このように我々はギョーザを副食として食べているが、中国では主食として位置づけられている。それに日本では焼きギョーザが主流だが、中国で餃子といえば水ギョーザか蒸しギョーザを指す。焼きギョーザを鍋貼儿（guōtiēr）と呼んでいるようだが、堅くなった昨夜の食べ残しを中華鍋に貼りつけるように並べて焼いて食べることがあるのでこのように呼ばれる程度のものであるそうだ。

日本でギョーザを注文すると一皿でせいぜい４～５ケというところだが、主食で食べる中国ではケタが違う。

三年前のこと、北京の王府井を歩いていたら「饺子大王」という看板が目に入った。昼時でもありお腹がすいていたので立ち寄ってみた。広い店内は中国人で超満員、やっと空席を見つけてテーブルにつくと、中国としては珍しくにこにこ顔の女服务员が注文をとりにきた。「你要几斤?」と言っているように聞こえた。えー！ 目方で注文するの？ 知らなかったのでびっくり。「一斤有几个?」「六十个左右」のような会話を交わした記憶がある。まわりのテーブルを見るとお皿に山盛りのギョーザを食べている中国人、一ケのギョーザがかなり大きい。我々は五人だから一斤もあればいいか、それに菜単から４～５品の料理を選び、青岛啤酒二本を注文する。茹でたてのあつあつギョーザは很好吃。これだけ飲んで食べて締めて９０元，約１２００円で５人が昼食を食べられるなんて安いと感じた。

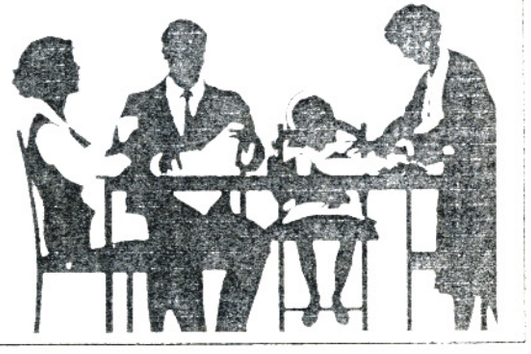
西安では名物蒸しギョーザを食べたことがある。直径２０センチばかりの小さな蒸笼（zhēnglóng）でそれぞれ違う種類のギョーザが次から次へと運ばれてくる。何種類あるか数えてみようとしたが途中で判らなくなってしまった。多分３０種以上はあったようだった。

中国では过年（年越し）の時に家中で餃子を食べる習慣があるそうだ。しかし近年では食生活水準が向上し、とくに若い人たちには麦当劳 màidāngláo（マクドナルド）や肯德鸡 kěndéjī（ケンタッキー）などの方が人気があるようだ。

日本でも同様に年越しそばや元旦のお雑煮を食べない家庭が増えてきているという。伝統文化を後世に継承するという観点からもなげかわしいことだと思うのは年寄りだけだろうか。

私たちの「中国語を学ぶ会」では毎年春に「餃子の会」を開いている。老師や来賓の中国人に教えてもらいながら、粉をこね麺棒で皮を伸ばす。餡儿も教える人によって作り方や材料が違う。今まで参加したことのなかった人も来春こそは本場中国の餃子作りしっかりと覚えてみてはどうだろうか。

（神　山）



ほかのホテルの人たちも続々と合流し登山道に長い列ができる。早朝でも登りが続くと暑い、じっとりと汗がでてくる。到着した「清涼台」はすでに人で埋め尽くされている感じだ。真っ暗闇のなかを良く見える場所を求めて右往左往する人、すでに場所を確保して岩の上にどっかと座っている人、カメラの三脚を立てて待っている人いたる所で人影がうごめく。私にはどの方角から太陽が昇るのかも判らない。岩の上に座っていた一団に誰かが声をかけた。「こっちは西だ！ここからは見えないよ」彼らは一斉に立ちあがってどこかに移動して行った。

待つことしばし、やがて東の空にうっすらと茜がさしてきた。峰々が、松の枝が影絵のように浮かび上がってきた。五分、十分が経ちひときわ茜色が濃くなったと思ったら、又普通の雲の色に戻ってしまった。雲が多いためなのかもしれない。周囲の人たちは動かずにじっと待っているが我々には集合時間が決められている。やむを得ずちょっと下って待っていると上のほうから時ならぬ歓声が聞こえるではないか。急いで引き返して見ると、木の葉の間から真っ赤な太陽が顔をのぞかせている。ビデオカメラのズームをいっぱいに引いて感激のシーンを撮影する。

ついにやった！　黄山のご来光を拝むことができたのだ、と年甲斐もなく興奮してしまった。

黄山は春夏秋冬それぞれに美しいたたずまいを見せてくれる山だという。雲海を見たければ五月と十一月の雨の後が最高だと閻さんが言っていた。秋の紅葉もすばらしいし、アイゼンをつけて登る冬の黄山も格別なおもむきがあるらしい。

山の天気は変わりやすい。下は晴れていても山頂では合羽は欠かせないといわれているこの山で雨にも遭わずに過ごせたのは幸いだった。これで中国旅行の思い出に新しい一ページを加えることができた。同学の皆さんも機会があったらぜひ行ってみてください。

神山　記